

### Ⅲ 今年度の研究実践

## 里山グループ

特別支援学校における児童生徒の里山を活用した 学習プログラムの開発・・・・・・・・・・	126
--	-----

## 特別支援学校における児童生徒の里山を活用した 学習プログラムの開発

高 敏 裕 今川陽子 福田貴子 田川由美

研究協力者：佐川哲也（金沢大学教育学部教授）

中村晃規（金沢大学角間の里山自然学校研究員）

### 1. はじめに

児童生徒が里山での様々な活動を通して、「ほんもの」の自然を五感で味わい、人・もの自然とのかかわりを広げていくことを願い、里山を活用した学習プログラムの開発に取り組んで3年目となる。

今年度は実践を重ねながらさらに、3年間の実践をふりかえりいろいろな視点から里山学習の有効性を検討した。また、各学部で教育課程への位置づけをすること、実践実例集を作成することをはじめ、里山への理解を広げる活動も行いながら成果をまとめることにした。

### 2. 小学部の実践

#### (1)今年度の取り組み

活動	ねらい	児 童 の 様 子
春の里山 にでかけ よう *雨のため 屋内  (5月)	「角間の里」や周辺の自然にふれたり、焼きおにぎりを作ったりして、春の里山を楽しむ	<p>新生児は初めての参加だったが、「角間の里」にはすぐなじんで、落ち着いて参加していた。</p> <p>雨の中でも池の水棲生物を捕りに出かけ、タモでいろいろな種類の水棲生物を捕ってきた。カエルの種類を確かめようと学生と図鑑で探す児童の姿も見られた。</p> <p>焼きおにぎり作りはどの子も関心を示し、焼いたり醤油を塗ったりして取り組み、おいしく食べていた。</p>
春の里山 で楽しも う  (6月)	新緑の里山に出かけ、散策したり、竹筒ごはんやねじねじパンを作ったりして楽しむ	<p>バーベキューコンロに炭火をおこすところから子どもたちは関心を示し、参加できた。ねじねじパンは生地感触を楽しみながら棒に巻き付けていた。ごはんやパンの焼き上がりを心待ちにしている様子が見られ、おいしく食べていた。池に「今日は何がいるかな？」と楽しみに見に行く児童が増えた。</p>
夏の里山 *雨のため 屋内  (7月)	昆虫の話の聞いたり、かき氷を食べたりして、夏の里山を楽しむ	<p>パソコンを使ってテレビ画面に昆虫が出てくるクイズでは、子どもたちはよく注目し、答えていた。室内のあちらこちらに昆虫(紙)を貼っておき、それを集める宝探しにもはりきって参加していた。かき氷作りではニコニコと作っては食べている姿が見られた。</p>
親子で里 山  (7月)	小2組の親子で流しそうめんや昆虫採集をし、夏の里山を楽しむ	<p>流しそうめんでは、竹を切って流す樋や器、箸を作るところから始めたが、皆関心をもって取り組めた。ねじねじパンも好評で、野外調理の楽しみ方を親子で味わえた。トンボなども捕れて児童もうれしそうだった。</p>

秋の里山 * 雨のため屋内 (11月)	落ち葉やドングリで遊び、秋の里山を楽しむ	落ち葉を題材にした葉っぱつりや、葉っぱ貼りをしたり、ドングリを樋から流したりして楽しんだ。遊びのコーナーを分けて行ったので、自分の好きな遊びを選んで楽しんでいた。
親子で里山 Part II (12月)	小2組の親子で野外調理などを行い、里山で楽しく過ごす	軒下で豚汁と焼きそばを親子で作った。和気あいあいと材料を切ったり、焼いたり、煮たりと調理が行え、楽しく食べた。「角間の里」の2階のコタツにも親子でのんびりに入って、ふれあいの場となっていた。

## (2) 活動内容

自然とふれあい、季節を感じる活動内容を3年間実践してきたが、1年目は試行錯誤で思いつく活動をやってみようとするめてきた。その中で年ごとに活動の内容やバリエーションが増え、児童に合った活動内容の精選がすすんだ。また、同じ活動内容であっても、児童に合わせた準備物(種類・数)や支援の仕方がなされるようになった。また、「角間の里」があることで、雨でも屋内ですごす活動内容を計画でき、定期的に里山学習を実施できた。

研究協力者の佐川教授や中村研究員と事前に打ち合わせを行い、指導助言を受けてきた。児童とともに活動に参加していただいたことで、本校の児童の様子を理解していただき、児童に合わせた対応をされている。特に「落ち葉で遊ぼう」の活動では種類の異なった多量の落ち葉を学生と事前に準備していただき、ダイナミックな活動ができた。

調理活動は楽しみの活動の一つであるが、簡単に焼くだけで素材そのものを味わえる「焼きおにぎり」「ねじねじパン」「竹筒ごはん」は好評であった。

3年間でさまざまな活動を行ってきたことで、児童に有効な活動内容が準備できるようになってきた。活動内容自体にあまりしぼられずに柔軟に対応すればよいのだが、自閉的な傾向のある児童が多いため、あらかじめ活動の具体的な内容や時間、場所を伝えておいた方が見通しをもって活動に参加しやすいようである。

## (3) 児童の立場から

小学部全体としては、年4回、四季を通じて里山を訪れることが定着した。学習を継続してきたことで、里山の自然に自らふれようと出かけ、木のぬくもりのある「角間の里」を心地よくすごせる場として認識している児童は多い。

活動としては、①四季に応じた活動→②ティータイム(簡単な調理)→③フリータイムといった流れで行ってきたことで、毎回見通しをもって参加できたようである。

春は、新入生が初めて参加するが、「角間の里」にすぐなじみ、落ち着いて過ごせている。「角間の里」周辺の池などに棲む水棲生物や昆虫を捕るのを楽しみにしている児童も多く、多少の雨でも元気に外に出かけていく姿が見られる。



写真Ⅰ 小学部「落ち葉で遊ぼう」



写真Ⅱ 小学部「竹筒ごはん」

夏の活動は梅雨の時期と重なり、また秋の活動も雨の日となり、屋内の活動が多くなってしまったが、児童が楽しめる活動が準備できるようになってきたことで、表情よく参加する児童が増えてきた。

小学部全体での活動では友だちを意識し、刺激を受け盛り上がることもあるが、場所や内容、時間に制約された面もあった。クラスで行った活動では小集団で、より児童の実態に応じた活動内容を準備でき、児童のペースに合わせて活動に取り組めた。

「角間の里」では、スタッフの方々や里山メイトの方々、学生ボランティアなど多くの人と交流する機会があるが、自分たちをころよく迎えてくれる人と認識し、ともに活動を楽しむ場面も多くなった。

四季を通じて里山に出かけることで、春の頃と比べると里山への認識(「角間の里」の建物、周りの自然、出会う人々など)の広がりを感じられる。

事前学習の時間はなかなか取りにくいのが、前日や当日の朝にその日の活動を写真入りの表にして提示しておくことで見通しをもって参加できているようである。事後学習では、活動したことを文や絵にして表すことでふりかえりを行ってきた。それを毎回続けることで活動をより深く印象づけ、また次回への期待もふくらんだ。また、児童の絵や文に写真も付けて掲示することで、文や絵で表せない児童のふりかえりにもなっている。

#### (4) 教師の立場から

里山学習の前週の部会で活動案を検討するようになってきた。活動を始めた1年目は何をするようにしたらよいか手探りのスタートであったが、活動を繰り返す中で「角間の里」やその周辺での様子がわかってきた。それにより、活動内容をより具体的にすすめる話し合いがなされるようになった。特に雨天案について、冬の遊びやクイズ、宝探しなど様々なアイデアが出され、里山での活動のバリエーションも増えてきた。

また、児童のために毎回の活動の事前学習用に写真入りの日程表を作成したり、活動の様子を保護者にも知らせる学級通信を発行したりしている。

#### (5) 保護者の立場から

児童の里山での活動を連絡帳や学級通信で保護者に伝えてきたことで、里山学習への理解が広がっている。「日頃子どもが自然とふれあう機会が少ないので、このような活動を続けてほしい」と感想をいただいたこともある。

夏季休業中や学校のフリー参観時に親子行事として保護者と一緒に「角間の里」で流しそうめんや豚汁作りを行った。一緒に楽しく活動できたことで里山の様子や子どもたちの活動の様子をよりわかっていただき、「楽しかった」「また行ってみたい」という声をよく聞くことができた。

保護者と休日に「角間の里」に出かけたり、「雪だるま祭り」など催しに参加したりする児童もみられてきている。



写真Ⅲ 小学部「虫捕り」

### 3. 中学部の実践

#### (1) 今年度の取り組み

活動	ねらい	生徒の様子
タケノコ掘り (5月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然の中でタケノコが生えている様子を知る</li> <li>・メイトさんに教えてもらい、タケノコ掘りの体験をする</li> </ul>	竹林に入り、里山メイトさんから地面から見えているタケノコの先を教えてもらおうと、自分で見つけようと走り回っていた。見つけると、自分で鍬を持って掘ろうとしたり、里山メイトさんと一緒に掘ったりして、掘りおこす楽しさを体験することができた。掘ったものをうれしそうに手にし、写真に撮ってもらっていた。
畑作り (5月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・草をとり、友だちと根気よく作業に取り組む</li> <li>・収穫するものを楽しみにして、種まきや苗植えをする</li> </ul>	草をつかんでひっぱる、草捨て場まで運ぶ、手を離して捨てるという根気のいる作業に、一人で黙々と、あるいは友だちと協力して取り組んでいた。種を一粒一粒数えたり、苗をそと手にのせたりしてやさしく植えていた。水やりを交代で繰り返し行った。
七夕 (7月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タケノコが大きくなり竹になることを知り、のこぎりで切る</li> <li>・七夕の話聞き、友だちと短冊を飾る</li> </ul>	七夕を飾りたいという気持ちを持ち、一つのグループが代表で竹を取りに行った。学生さんたちと一緒に竹を探し、日頃の、のこぎりの成果を活かして、自分たちで切った。中学部全員の短冊を飾り、学部集会で、七夕の話聞いた。
畑の収穫 (9月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫の喜びを感じ、大切に収穫する</li> <li>・収穫したあとの脱穀などの処理を自分たちの手で行う</li> </ul>	トウガンは落とさないように大事そうにかかえて運んでいた。トウガンを全校の給食の材料にして学校中で味わってもらうことにより、校内の多くの人から「おいしかった」と声をかけてもらい、うれしそうであった。ポップコーンの収穫、皮むきは中学部全員で行った。一部のグループの生徒ではあるが、販売したい、みんなで食べたいという目的を持ち、脱穀の作業に意欲的に取り組んでいた。
ドングリ拾い (10月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドングリ拾いを楽しむ</li> </ul>	日頃あまり見たことがないためか、「あったー」「見つけたー」とうれしそうに拾って袋に入れていく姿が見られた。(中1クラス活動)
オリエンテーリング (11月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・里山の各ポイントを見つけ、達成の喜びを感じる</li> <li>・グループの友だちと協力する</li> <li>・季節を感じながら、歩く</li> </ul>	各ポイントには暗号が隠され、意欲的に見つけようとする姿が見られた。実際にまわる時には、地図が難しい生徒もいるが、どのコースからまわるか相談する、遅い生徒を待ってあげる、友だちのシールをとってきてあげるなど、クラスみんなで協力して行動する様子が見られた。今年は小雨の中だったが、すべてをまわりきり満足そうな表情が見られた。
トウガンスープづくり (11月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼食の準備を自分たちで行い、満足感を味わう</li> </ul>	オリエンテーリング後の、昼食のトウガンスープは、当日は教師が作って生徒の帰りを待ったが、材料の買い出し、食器の準備などは生徒が行った。自分たちで育てたトウガンのスープは、オリエンテーリングの達成感とボランティアの学生や里山スタッフと一緒に食べる楽しさも加わり、とてもおいしかった。

#### (2) 活動内容

「角間の里」ができ、計画的に里山学習に取り組み始めた平成17年度は、どのような活動ができるのか、とにかく数多くの実践をこころみだ。どのような活動でも、子どもも大人も楽しめるということがわかった。2年目の平成18年度は、前年度の実践を受けてより有効に行うために、年度当初から計画を立て実践を行った。天候によりできなかった活動

もあるが、里山学習には、生徒にとって確実に力になるものがあるということが実感できた。さらに、里山での活動の前後にかかわって学習の広がりの可能性も見えてきた。これらのことから、里山学習は学習指導要領の「総合的な学習の時間」の「ねらい」、さらには「学習内容」に重なるということを確認し、本校では、4つの観点(①活動に興味をもち、意欲的に参加する②季節に応じた活動を通して、自然とふれあう③人とのかかわりを広げる④活動を通していろいろな道具の扱いを経験する)を学部の全教師で話し合い、中学部教育課程の「総合的な学習の時間」に位置づけた。3年目である平成19年度は、生徒が、自分たちで、行くまでの計画・準備から、帰ってきてからの活かし方まで、長いスパンで考えることができるようになった。畑の作物などは、植えるものによって収穫したあとの活動の発展の仕方は様々であり、収穫したものを全校にさらには校外へまで広げるといふ、先の活動を考え、作物を選択するようになった。

里山学習では、一つの活動の中からも様々な生徒の興味や意欲を引き出すことができ、人・もの・自然とのかかわり、さらには活動の発展の仕方を考えるなど、あらゆる面からの学習の可能性をもっている。現在、中学部全体としては、タケノコ掘り、畑作り、畑の収穫、オリエンテーリングの4つが年間の学部行事として定着した。また、クラスやグループという小集団で、季節に応じ、七夕、虫捕り、調理、ドングリ拾いなどで里山を訪れている。

生徒一人一人の生活の幅を広げるためにも今後も継続して里山での活動をすすめ、いろいろな良さを感じてくれることを期待したい。これまでは屋外の活動が主になっていたが、雨天でも「角間の里」の中で、十分に里山を感じることができる活動には何があるか模索している。

### (3) 生徒の立場から

中学部では、次週の活動について、学部集会などで、具体的な日程、持ち物、大まかな活動内容など実物を見て、見通しがもてるようにしている。特に里山での活動については「角間の里」の写真や、前年の活動の写真を見て、楽しかったことを思い出すことができるようにしてきた。このことにより、事前に予定が知らされると、経験したことがある生徒たちは昨年を思い出し、初めての生徒たちは興味や期待を広げ、「早く行きたい」「晴れたらいいね」ということを口々に言い、楽しみにしている様子が伺える。そして、準備が必要な場合、グループごとに役割分担し、意欲的に準備する姿が見られた。畑作業でも、手順をはっきりわかるようにし、今何を植えているのか、苗や種の状態でも収穫するものの写真を一緒に見てわかるようにすることで、楽しみにできるようにしてきた。その結果、自分たちが植えたという意識を継続することができ、収穫の際にも、とても大事そうにかかえ、「トウガンスープにしようね」「ポップコーン食べたいね」などと会話も弾んでいる。みんなでおいしく味わい、さらには自分たちの育てたものを販売し、買ってもらえたときの喜び、育てたことに対する賞賛の声は、生徒たちにとって大きな自信と誇りになるであろう。



写真Ⅳ 中学部「畑作り」



写真Ⅴ 中学部「タケノコ掘り」

事後には活動の様子を日記に書いたり、収穫したものを写生したり、作品を作ったりして残している。その時の話や内容からも、思い出に残った様子が伺える。家でもその日あったことをうれしそうに話をしてくれているという保護者からの言葉が聞かれた。

小集団での季節に応じた活動については、各クラス、グループに任されているところではあるが、その活動ごとに「生徒のこんなすごい面が見られた」「とってもいい顔をしていた」などいい感想や発見が伝えられる。また、「角間の里」という場所にも慣れ、のんびり過ごせたり、自ら好きな遊びを見つけてやりだしたりということもできるようになった。



写真Ⅵ 中学部「トウガンの収穫」

#### (4) 教師の立場から

4つの観点を学部の全教師で考え、話し合って決め、「総合的な学習の時間」として位置づいたことにより、どの活動も皆で協力して取り組んでいる。また学部行事となった大きな4つの活動の他にも、「ぜひ今の季節に行きたい」「今年はその活動はしないのか」という声が里山グループ以外の教師からも聞かれ、とてもうれしく感じている。里山での活動が生徒だけでなく、教師にも影響を与えているということであろう。3年間継続して行ったことにより、教師にとっても見通しをもちやすくなり、配慮が必要な生徒や持ち物についても、事前に予想をたてることができようになった。また慣れてきたことにより、生徒の実態にあわせ柔軟な対応もできるようになった。今後とも学部行事だけでなく、各クラス・グループで、さらに積極的に活用してもらえるようになることを願っている。

#### (5) 保護者の立場から

タケノコ掘り・流しそうめんなど親子での活動について、「親子でとてもリラックスできました」「自然の中の活動は親子で素直に楽しめる」という意見をいただいた。また、収穫したタケノコを持ち帰り、家族みんなで味わった夕食の様子を知らせてもらったりした。「家族一人一人に自分の採ったタケノコをアピールしていました」「子どもはもちろんのこと家族全員でおいしくいただきしてもらいました」「おばあちゃんにおすそ分けしたらとても喜んでくれました」などとてもあたたかい言葉をいただいた。保護者にとっても自然の中で一緒に楽しむことはもとより、「自然の中でゆったり過ごしてほしい」「(里山で)見たもの、感じたことを通して心を落ち着かせてほしい」という願いはあるようである。親子活動の計画が少なかったのが反省すべき点である。

## 4. まとめ

小学部と中学部の今年度の実践を具体的に見てきたが、ともにその学部に合った活動が充実してきたことがわかる。小学部では、あいにくの雨にふられることが多かったが、そのことで雨でも「角間の里」で過ごす活動を充実させることができた。中学部では、畑作業などで、長期的な計画を立て年間を通して活動が継続できるようになってきた。今後もこの恵まれた環境を存分に活かした里山学習を継続し、さらなる活動内容の充実やプログラムの開発、また、高等部での計画的な里山学習の実践が望まれる。

自然の豊かさを十分味わい、存分に楽しみ、友だちや教師、里山で出会う人たちとのかわりをさらに広げ、一人一人の豊かな生活につながっていくことを願っている。